

## ■東日本大震災の復興はどこまで進んでいるか-駆けある記

2017.9.29 としまち研災害復興まちづくり支援委員会 委員長 三浦史郎

東日本大震災発災から 6 年半が経過した。「集中復興期間」は発災から 5 年を経た 2016 年 3 月末で終了し、2021 年 3 月まで 5 年間の「復興創生期間」に入っている。全体に、被災 3 県総延長 400 km と言う巨大な防潮堤や大規模な嵩上げ工事は進んだが、被災者の生活再建はまだ道半ばと言ってよい。6 年半を経て未だに避難者が 9 万人(2017 年 7 月時点)、福島県で今年 4 月に 4 市町村で避難指示解除されたとはいえ依然 5 万 8 千人が避難を続けている。岩手・宮城両県でも 3 万 2 千人が日常を取り戻せていない。多くの被災者が生業を失い、未だ元の暮らしを取り戻せていない状況にあるとみるべきであろう。

復興庁は、2017 年 7 月時点の復興状況について公式発表した。復興道路・復興支援道路の着工 100%、完了 49%であり、まちづくり（防災集団移転・区画整理事業）は着工 402 地区 99%、完成 13,020 戸 69%達成と言う。災害公営住宅は着手 29,785 戸 98%、完成 25,029 戸 80%で、住宅自主再建（被災者生活支援金・加算部分の支給状況から）は 13.5 万件としている。

8 月、復興支援委員会有志で、宮城県の気仙沼・南三陸・女川・石巻・東松島・仙台・名取と駆け足で復興状況を見て回った。その内、東松島市あおい地区を訪ねた印象を紹介する。

◆ 8 月 18 日（金）朝に東京を出かけた 3 人旅。昼前いわき市に入ったと同時に道路脇に空間線量を示す 0.1~2.8 $\mu$ s.v.の表示板が、その地に来たことを知らせる。相馬 S A で食べた 620 円の「なみえ焼そば」が美味しかった。

常磐自動車道から三陸自動車道を北上して南三陸へ着いたのは午後 3 時半、元のサンサン商店街は「南三陸ポータルセンター」になって訪ねる人もまばら。旧南三陸防災庁舎のすぐ横に新装なったサンサン商店街がオープンしているが平日のせい客足は少なく、広々とした大通りは閑散として寂しい。防災庁舎も化粧直し中で、まるで鉄骨建て方が終わったばかりの工事現場のよう。脇の八幡川堤防も嵩上げ改修工事中で、遺構としてどう整備するのか案内が無い。そこから 10 分少々北に、もう気仙沼線の鉄路が無く B R T の駅になった旧歌津駅があり、駅前にハマレ歌津と言うマーケットがあった。立ち寄ると飲食店だけでなく用品店もある。昔の馴染み買いに来るくらいだけど続けているんだ、と淡々と語ってくれた。移動郵便局車の姿があった。



旧サンサン商店街

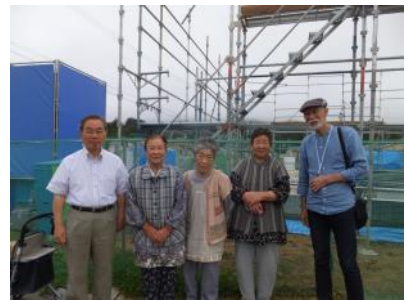


新サンサン商店街

気仙沼市に入って、北大の森傑先生が一木会で計画を話してくれた小泉地区を訪ねた。住民主体で高台移転計画のモデルと言われた地区で、当初 125 世帯の意向があった集団移転地だ。被災前から存在した強いコミュニティを将来に引き継ぎたいと願って、自宅の再建と同時に数十年後のまちづくりを目標にしたと言う。移転先は遠くに太平洋を望む高台で、周辺自然環境は申し分ない。東側を走る三陸自動車道も海への視界を遮らぬよう交渉した結果、地区の足元で工事中だった。道で 3 人のおばあちゃんに出会った。話を聞くと、通過車両の入らない袋小路状のクルドサック的な路地はまだ十分理解されていないようで、車利用が回り道しなければならないと注文がついた。最も頭を悩ましているのが買い物や医療の悩みようだ。当初計画から戸数が減り 65 世帯となったことで、店舗やお医者さんが成立する戸数ではなく、巡回でのサービスも今の所無いと言う。特に高齢者にとっては辛い所だ。生活再建の厳しさをどう克服していくか住民力はこれから発揮されるのだろう。



移転した小泉地区



出会った 3 人のおばあちゃん



気仙沼の防潮堤と被災した鉄道

防潮堤が大問題となった気仙沼市内湾地区に着いたのは辺りが薄暗くなった 6 時頃だった。魚問屋の並ぶ魚町と商業集積エリアの南町が、大きな津波被害を受けた。県から示された防潮堤計画高さは TP6.2m で、まちから海への眺望が遮られ、美しい港町の景観が失われてしまう、東洋一の魚市場のある良港の港文化の営み機能が喪失すると、多くの住民は絶対反対の声を上げた。背後に山を背負う地形は高台への避難距離も短く、隣接沿岸地区よりも人的被害が少なかったこともあり、津波対策としての避難路整備を要望した事実もある。しかし「反対していても街づくりは前に進まない被災者は内湾から離れてしまう。生業と住まいを考える上でも納得できる高さで合意しよう」という考えにシフトした。その後 3 年間に多くの提案や検討を経て、魚町岸壁では TP4.1m の上に津波来襲時に水圧と浮力で鉄板が 1m 分上がるフラップゲート式防潮堤で対応することとし、見た目 1.3m で海が臨めるようにすることにした。TP5.1m で整備となった南町海岸では、防潮堤の海側に観光交流広場を整備し、斜面緑地やイベント時の観客席利用もできる避難階段などを備え、陸閘でまち側と行き来できる動線の計画や、防潮堤の上に木製デッキを設けるなど、堤の内外を一体的に繋ぐウォーターフロント商業施設が今年 7 月着工した。

商店街や住宅は民間主導となるため、地域住民主体の「まちづくり会社」を作って取り組んでいると言う。街中には被災土地の共同利用で災害公営住宅と店舗やコミュニテ



気仙沼南町災害復興住宅

施設、福祉施設などの複合ビルが4か所（八日町・魚町・南町1・2）計画され、昨年相次いで完成入居した。

かまぼこ店・工場やディサービス施設と災害公営住宅36戸が入る南町「夢コモンズ」でおばあさんに話を聞いた。「住宅には満足している」「今は買い物に不便を感じるが、もうすぐマーケットもできる待ち遠しい」「いざという時には裏山(浜見山)へ階段で行けるし安心」と言う。

途中、ロードサイドレストランで夕食を取り、女川駅前のトレーラーハウス「E L ・ F A R O」に着いたのは9時半。どっと疲れが出て塾睡出来た。

◆ 8月19日（土）朝8時半に女川の海鮮朝食を求めて町内を回った。記憶を頼りに訪ねた場所にはどこにも食堂自体がなくなっていた。女川のまちは土曜の朝でまだ眠っているように人影がない。駅周辺・新しく出来た「シーパルピア女川」「ハマテラス」ともまだ来朝者の来てない時間なのだろう。災害公営住宅などの建つ元運動公園には足を向けなかった。時間も気なるので、空腹を抱えながら石巻へと急いだ。日和山に着いたが周辺に朝食のとれる店が無く、知り合いに連絡して市場の食堂を紹介して貰った。10時にやっと「斉太郎食堂」でカツオ定食にありついた。やっぱり市場のネタが良いし、きゅうりのからし漬けが旨かった。



女川駅

女川でも石巻でも道路が付替え工事中で車のカーナビが全く役に立たないため思わぬ時間が掛かってしまった。石巻で訪ねる予定にしていた蛇田のニュータウン群も、ぐるぐる回っただけで肝心の公営住宅などは見られずじまい、準備不足が祟った。



女川駅の周辺

あおい地区の夏祭りにはまだ少し時間があつたので、野蒜の新しいまちを見てみようと思った。途中で小野駅前仮設住宅に立ち寄り、武田会長を訪ねた。「あ～らしばらくだねえ、もうすぐ間寛平が走ってくるってよう！」自宅は再建したはずだが、相変わらず集会所に元気で居た。仮設住宅は2棟くらいが残っているだけで、周辺は37戸の災害公営住宅が立ち並んでいた。



新しくできた野蒜ヶ丘(災害公営 170、自力再建 278、計 448 世帯の計画)には住宅の他に商業・厚生施設・学校などが混在している。C・W・ニコルさんが関った木造校舎で注目された宮野森小学校(宮戸・野蒜両学区と「森の学校」から名付けられたと言う)が地区の真ん中に、西側に東名駅が移転され、東側に移転されたJR野蒜駅からは連絡通路(未整備)で旧野蒜駅へ歩いて行ける。旧野蒜駅は津波被災の爪跡の残る遺構として、被災映像などの視聴や展示がされている「伝承館」となっており、バス利用の来館者にも会った。集会所では新しいまちの自治会発足へ向けた会合が行われていたが、そこに懐かしい生活再建担当者の顔を見つけ、近況報告。昼食は懐かしの「えんまん亭」で済ませ、あおい地区へ向かった。



小野の復興住宅



野蒜ヶ丘集会所



あおい地区のまつり



獅子舞に頭を差し出す親子でにぎわう



ねぶたと街中を大勢で練り歩く

としまち研が3年間まちづくり支援を続けた東松島市あおい地区で、昨年9月に盛大な「まちびらき」があった。今回、その後1年のまちを訪ねた。(あおい地区のまちづくりについては、その記録誌が発刊されました。どうぞ手にとってご覧ください)

西広場はたくさんの人であふれていた。伝統の獅子舞が2頭、子どもの頭を噛むしぐさを繰り返すたびに歓声が上がリ、次々に頭を差す親子が後を絶たない。広場の周囲は住民の屋台でいっぱい。秘伝塩だれと銘打った1丁目の焼き鳥が絶品。焼き手も売り子も馴染みの人ばかり、陽が傾くまで集会所脇のステージでは歌や踊りが続く。としまち研事務局を手伝ってくれた阿部久美子さんや市役所の生活支援担当者も駆けつけてくれた。ディープな話になってしまうが、方向はすべて前向きだ。いつの間にか市長や議長など議員も顔を見せ、人はどんどん増える。陽が沈むと、暦年のグランプリに輝いた跳ねっ人数人が太鼓の響きとラッセラーの掛け声に合わせて空を蹴る、弁慶をかたどったねぶたが動き出す。暗くなった街中へ練り出し大勢の人がゾロゾロ後を追うように跳ね踊る。8時を過ぎてようやく祭りは一段落する。誘われるまま街の飲み屋へ数人で練り出し、嬉しいお酒を頂いた。



東松島市あおい地区 災害公営住宅(左・中央)と自立再建住宅(右)

- ◆ 8月20日（日）ホテルを出て、会長に話を聞きに伺った。心配していた自治組織も初動から2年半過ぎた。市内に無かった新しいスタイルの「あおい地区会」（地区内3つの自治会の連合組織）を作り、「お茶会」や見守り部会が動き出し、見守り隊も募集している。見守り、安否確認等を行い「声かけ訪問」も考えていると言う。また、イベントで特技を発揮してもらえるよう、高齢者に「人材バンク」登録を呼びかけているなど、高齢者が介護を受けないで済むように、「地域でお互いに頑張る」というのが基本姿勢だと言います。ゆくゆくは、見守りサポート業務を地区会で市から受託することを考えていると語ってくれた。更に、地元大学と協同で、血圧や体温の訪問測定や、病院と提携して往診の仕組みも検討しているなど、自治組織を中心に福祉のまちへと動きが出ている。移転元の土地を市から借りて、高齢者や子どもたちの「あおい農園」を作りたい。学区を超えた「地区こども会」をつくり、収穫祭などを通して、老若男女の結びつきを強めていきたい。など構想はどんどん広がっている様子だ。

地区会の会長が「あおい地区に住んでいるみなさんが、『ああ、ここに住んでいて良かった。安心できる日本一幸せなまちに住んでいるなあ』と感ずることが、目標にしてきた“日本一住みやすいまち”だと考えており、夢ではなく実現に近くなっている」と手ごたえを感じている。と話してくれた。今年は快適度No.1に選ばれ（東洋経済誌）た。

その後、あおい1～3丁目住宅地のまち並みと緑化の状況を見て回った。1丁目の災害公営住宅では各戸の庭にブルーベリーがちゃんと育っており、鳥が啄むのを防ぐために吊り下げられたCDが風に揺れる。まち中で緑と生りものと花に出会う。辻々で知った顔に出会う。近況を交流する立ち話にも花が咲く。5階建てのベランダからも声が掛る。支援活動卒業して2年半経っても直ぐ気持ちが伝わるのが嬉しい。ずっと居たいけど11時頃にはあおいを出立した。



竣工時に植えたブルーベリー

仙台市の南、長町駅周辺に3棟の復興公営住宅が完成し生活が始まった。その1棟「あすと長町第2市営住宅」に着いたのは12時ちょっと前。様々な地域の仮設住宅から転居して来た被災者の、新しいコミュニティづくりや自治組織を支援するため「つながりデザインセンター・あすと長町」というNPOが立ち上がった。被災した一人一人が安

心して日常を過ごせるよう、ヒト（支援する人、される人）・モノ（居場所空間）・コト（支援・イベント等）をゆるやかにつなぐ「復興コミュニティデザイン」に取り組んでいる。ここで、としまち研の宮本さん親子と合流。訪ねた日は、集会所で「あすと交流会」が開かれていて、40人ほどの人が集まっていた。多くは高齢の方で若い人がチラホラ、無理やり割り込んで着席して手作りランチを頂き、フラダンスが披露され、最後はみんなで輪になって、まるで盆踊りのようにフラを踊った。ここでは、評判のあすと食堂や健康相談などの他、傾聴カフェ・フラダンスサークル・シンギングサークル・太極拳など多彩な活動をしている様子が壁のスケジュール表に埋まっていた。それだけ声掛けの機会もあるということだろう。活動は第1～第3市営住宅をつないで行われていると言う。



震災遺構となった荒浜小学校

そのあと、若林区の荒浜を訪ねた。一昨年、放火の被害があった貴田さんの小屋は復活していたが留守だった。隣の黄色いハンカチがたなびく「里海ロッジ」に東北工大の新井先生たちが居り、活動を続けていく上での課題や取り組みの近況などを聞いた。近くの旧荒浜小学校は被災を記録して伝える遺構として残され整備が終わって公開されていた。校舎のあちこちに残る被害の跡が生々しい。この日は2・30人くらいが見学に来ていた。新設されたエレベーターで知った顔に出会いびっくりした。

ここから隣町名取市の閑上は15分くらい。定番の日和山へ上り周りを見ると、少し離れて6階建ての災害公営住宅が数棟建っている。周辺は嵩上げ工事が進められているが、本当にこの広さを5mも土盛りするのだろうか。帰還希望者が減っていると聞いたが、一体どのくらい帰ってくるというのだろうか、無駄にならないければよいが…。



日和山からの風景

帰京時間から逆算して3時半には閑上を後にして、常磐自動車道を一路南下した。

復興が進んでいると聞く宮城県も、6年半が過ぎたと言うのに、北部ほど被災地の復旧は遅れているようだし、被災者の生活再建は住まい・医療・買い物・学校などまだまだと感じた。（了）

（文：三浦史郎 写真：杉山昇・杉山洋子）